

福田和也 編

江藤淳

コレクション

2

エッセー



ちくま学芸文庫

江藤淳コレクション2 エセー

二〇〇一年八月八日 第一刷発行

著者 江藤 淳 (えとう・じゅん)

編者 福田和也 (ふくだ・かずや)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊟二二―八七五五

振替〇〇―一六〇―八―四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市櫛引町二一六〇四 ㊟三三二―八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© NORIKO FUKAWA 2001 Printed in Japan

ISBN4-480-08652-8 C0195

ちくま学芸文庫

江藤淳コレクション 2

エッセー

福田和也 編

目次

戦後と私

10

∴

一族再会（抄）

39

母

40

祖母

89

もう一人の祖父

177

∴

夜の紅茶（抄）

247

犬さまさま ミスター・エトウ・イズ・オン・ヴェケーション 風邪の愉しみ
風邪と犬と清親と 夜の紅茶 私の中の日本人——クリステイン・ローレンス

西御門雜記（抄）

285

梅にウグイス 谷戸の夏祭り 軽井沢のゴミ集め
原稿用紙の話 東郷元帥五十年祭

∴

日本と私

303

∴

文学と私

480

短い青春 494

山川方夫と私 498

場所と私 545

∴

渚ホテルの朝食（抄） 565

帰る場所

昭和二十五年の万平ホテル

庭の言葉

渚ホテルの朝食

初出一覧 584

解題 二 福田和也 587

江藤淳コレクション 2

エッセー



戦後と私

I

このあいだ久しぶりで父からもらった葉書に、二十数年ぶりでゴルフのコースに出たら少しもあたらなかった、と書いてあった。父は筆不精な人間で、私が米国にいたときも一年に一度手紙をくれればよいほうだったほどである。それがなにを思ったのか、時候の挨拶も抜きにしてゴルフをしたことを私に伝えたい心境になったらしく、ある感情のこもった便りをくれた。

そのとき私は、父がまたクラブを握るような気持になっているのなら、つきあってもいいなというようなことをふと考えた。父のハンディが昔いくつだったかは、もう忘れた。しかし、二十数年ぶりで、ゴルフを再開した父は、自分でいうように少しもあたらな

であろう。ゴルフという遊びをほとんどしたことのない私のほうは、もちろん全然あたらないに決っている。が、それにしてもそうして二人でコースをまわっているうちに、父は父なりに、私は私なりに、空振りしたクラブの先から抜け落ちて行くもののかたちを見るかも知れない。そんなゴルフアーを許容するコースが今あるかな、と私は一瞬かなり真剣に考えた。

というのは、戦後というものを、私は現在こういうかたちでしか考えられないからである。敗戦以来、私はいわばいつまた父がゴルフをやりはじめるだろうかと心待ちにして来たようなものだ。それはあるときは意外に早く来そうに見え、あるときは永久に来そうもないように思われた。幾度か父にまたゴルフをやったらどうかと勧めてみたこともあったが、受けつけなかった。それは父が昔のような充足した気分に戻っていないという意志表示である。

父は大して出世もしなかった銀行員にすぎないが、私の今の年齢には親譲りの家に住んでゴルフをしたり、謡をうなったり、薔薇をつくったりして、夏になると私を避暑につれて行った。避暑地のホテルで父は私にベビーゴルフを教え、私が遊んでいるところをパテのシネカメラで撮ったりした。私は父の乗馬姿を見たことがないが、以前は馬にも乗ったらしく、戦災で焼けた大久保百人町の家には拍車のついた長靴があったのを覚えていた。その当時父が充実した気分だったのか、つまり幸福だったのかどうか私にはわからない。

い。しかし自分にそういう遊びが似合うと思つていたことは確實であり、戦後そういう心境になれなかったので、つまり不幸に耐えねばならないと思いつづけていたので、一度もゴルフ場に足ぶみしなかったのである。

そういう父が、この夏になつて突然ゴルフをしたといつてよこしたのは、しかし自分が漸く楽隠居の身分になつたと思つたからではない。父はたしか六十五になるが、楽隠居というにはほど遠く、おそらく今後死ぬまで絶対に昔の生活が戻つて来ないことに見きわめがついたので、ゴルフをやってもやらなくても同じことだと思ふようになったにちがいない。そういうことは別段説明されなくても私にはよくわかる。不幸に耐えるという姿勢は希望の一変型にすぎない。希望がなくなつたとき人は耐えさえしない。私はだから、父がなにかの拍子でまたゴルフをはじめたことを喜んでいいのか悲しんでいいのかわからない。確実なことは、多分父がもう他人のことなどあまりかまわぬような氣持になつていて、一種空漠とした自由さでクラブを振りまわしたにちがいないということである。

父が不幸であろうがなかろうが、どうでもいいということは私にはできない。というのは、私は国というものを父を通してしか考えることができないことに、近頃氣がついたからである。父はかつて私にとって最初の他人であり、また私と他人との、つまり社会というもののとの通路であつた。私は社会や、国家や、さらにその向うにひろがる世界についての最初の感覚を、おそらく父から得ているにちがいない。父は銀行に勤めていて戦争には

行かなかつたし、絶えずこの戦争には勝ち目がないという情報を披露しては私を不安がらせたり憤慨させたりしていたから、その半生が日本国家の消長と直結していたということはない。しかし父の父、つまり私の祖父の生涯がある時期の日本の運命と直結していたと考えるのにはいくらかの理由がある。だが、大正二年に死んだこの祖父にも、私は父の記憶を通してしか肉感的なたちで結びつくことはできないのである。

祖父は佐賀藩の貢進生として勝海舟が越中島に創設した海軍兵学寮に学び、首席で卒業して明治政府が英国直輸入の方法で養成した初期の海軍士官のひとりになった。明治三十五年、海軍大学校から派遣された委託学生として東京帝国大学法科大学に学んだときの論文の写しが父の手許に保存されている。当時祖父は中佐で、論文は和罫紙に毛筆細字で書かれ、海軍大学校長に提出されているが、その内容は西洋社会思想史、特に社会主義に関するものである。

因みに祖父は森鷗外より五歳年少である。鷗外が社会主義について書き出すのは明治四十三年の幸徳秋水の大逆事件以後だから、これは鷗外の研究の広さと深さには遠く及ばないとしても、少くとも時期的には先んじているものとしなければならない。祖父がなぜこの問題に関心を持ったか、指導教授が誰でどういう径路で文献を入手したかについては私はまだ調べていない。しかし祖父はそこでユートピア社会主義、アナルコ・サンディカリズム、および共産主義の沿革を概説しつつその各々を批判し、国家の指導による漸進的な

社会主義を将来帝国政府が採用すべき内治策として推している。

日露戦争のとき祖父は大佐で、山下源太郎と並んで少将相当官の大本営海軍部高級参謀であり、同時に高級副官を兼ねた。戦時大本営勤務令によると、海軍幕僚の職分は「海軍ノ作戦ニ関スル機密事務ニ服ス」ことであり、高級副官のそれは第一に人事、第二に新聞弘報活動である。このときのスタッフは軍令部長大將子爵伊東祐亨以下参謀大尉伊集院俊にいたるまでわずか十五人にすぎず、祖父の席次は軍令部次長についてその第三番目であった。明治天皇御大葬のときまで祖父は中將に進んで軍務局長となり、勅任官総代として桃山御陵に供奉した。私は当時祖父が連日の過労のあまりある式典の会場で大礼服を着たまま貧血をおこしかけ、隣りにいたベルギー公使夫人に介抱されたという話を祖母に聞かされたことがある。

大正二年一月、帝国議会開会中に政府専門委員として連日答弁に立つうちに祖父は肺炎に罹り、数週間ののちに急逝した。今日の数えかたではまだ四十七歳で、海軍最年少の提督のひとりであり、現役だったので海軍葬によって葬られた。私はプリンストンにいたとき、その頃の祖父の動静がゲスト東洋文庫に備えられていた博文館発行の雑誌「太陽」の日録に報じられているのを発見して、あるなつかしさを感じたことがある。鷗外と同じように祖父は袴をつけたまま病臥していたという。勅使や上長のお見舞に対する配慮である。現に死ぬ一週間前、特旨をもってお見舞に差遣された侍医頭青山胤通を四十度の高熱をお

して衣服を正して迎え、それが直接の死因になった。だから祖母は終生決して青山博士を許さなかった。

祖母の感情は夫に先立たれた女の感情として理解できないものではない。しかしこの頃では、私はこれは多少青山博士に対して酷にすぎるのではないかと思うようになった。青山侍医頭は傲岸不遜をもって知られた人物だが、勅命で差遣されたのであり、いわば単なるつかい走りにすぎない。その背後に何者かの意向が働いていたとしても不思議はない。そしてその何者かが、佐賀藩出身の祖父が薩藩出の海軍大臣山本権兵衛に重用されるのを見て、快く思わなかった薩摩出身の競争者たちだったとしても、あまり不自然ではない。私は数年前に中村光夫氏からその可能性を指摘されるまで、このことに考えが及ばなかった。もしそうなら、中村氏の表現を借りれば祖父は文字通り「薩摩に殺された」ことになる。

英国風の軍装をつけて参謀肩章を吊り、勲章を佩用した祖父の遺影は、ちよつと夏目漱石に似ている。軍人というよりは学者のような顔である。私には嫉視されるほど昇進の早かった祖父が、海軍で果して幸福だったのかどうかわからない。またもし祖父が「薩摩に殺された」ののだとしても、果して「殺される」に価したかどうかわからない。いずれにせよ祖父の生涯は、たまたま文章を書いて暮すようになった孫のひとりが私情をもつてするのでないかぎり、記録に価するものとは思われないからである。